

編集後記

昨年の年報を読み返しましたところ、後記で新型コロナウイルス（COVID-19）の話題を挙げていました。まさか 1 年以上も悩まされる結果になるとは、思ってもいなかった方も多いのではないのでしょうか。感染によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔み申し上げますとともに、罹患された方々には心よりお見舞い申し上げます。

このような未曾有の出来事がありました。一方で、新しい技術革新があった年でもあったかと思えます。革新というよりは、成功していた技術が普及した（普及元年）、とも言えるかもしれません。一つは、ファイザーやモデルナなどが製品化した mRNA ワクチンが挙げられます。これらは新技術を用いた医薬品にしては、異常な速さで開発や臨床が進みました。それもそのはず、コロナの遺伝子配列がわかった数日後には既に候補設計ができていた・・・という報道もあるくらいですから驚きです。もう一つは、もはやお馴染みとなった「リモート化」です。企業では事務や営業だけでなく、従来は考えもしなかった開発や製造のような業種にまでも広がっていると聞きます。機器センターでは多数の分析装置を扱いますが、それらにも「リモート化」・「自動化」の波が来ていると感じています。分析装置といえ、たくさんのスイッチやノブがあり、専門のエキスパートが付いて緻密なコントロールが必要・・・などというのが当たり前の時代もあったかもしれませんが、今ではスイッチレスの全自動が当たり前のようにもなりつつあります。

いずれにしても、どちらの技術もコロナ禍が起こる前に、着々と準備されていたものでした。感染爆発のようなリスクは、実は予見できなかった事態ではない（以前から盛んに警告されていた）のですが、対応できた事例、できなかった事例を比べると、大きな格差が生まれてしまったのではないのでしょうか。事例ごとに対応の難しさの違いはもちろんありますが、対応の「速さ」はどれだけ予見や準備をしていたかで決まっています。機会を逃さないように、アンテナを高くして日々の業務を進められれば、きっと何かの役に立つ日が来るかもしれません。なかなか実現は難しいことではありますが、私個人だけでなくセンターとしても将来を見据えた対応ができるように心がけたいところです。

センターでは今後も利用しやすい環境を整え、皆様にも安全・安心にご利用いただけるよう努めていきたいと考えております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

（石原）